

浄土宗、知恩院派、法然上人25霊場のひとつ。承元元年（1207）に法然が讃岐に赴く途中、木曾義仲の側室であったという伝説のある遊女友君を帰依させ、のち安貞2年（1228）その地に法然の弟子の信寂を開山として建立された。

上人と友君の合作といわれる法然上人像、近松作の恋物語「お夏清十郎」のお夏像がある。西門の外にある石塔は友君の墓と伝えられる。海側へ降りた所にある井戸は法然上人貝堀の井戸といわれ、飲み水に困っている室津の人々のために海辺の貝で掘ったという淡水の井戸。

室津は旧くからの港町、そして本朝遊女の始まりといわれる歓楽の町、「法然上人絵伝（国宝、知恩院）」や、井原西鶴の「好色一代男」には当時の室津の風景が描かれているので紹介したい。

法然上人絵伝 巻三十四（抄）

3月16日に、都を立つ。信濃の国の御家人、^{かくはり じょうあ みだぶつ}角張の成阿弥陀仏を棟梁とする力者たちが上人の御輿^{みこし}を担いだ。もとより上人は金剛草履^{こんごうぞうり}で歩かれるのを本分とされたが、老境に至っての故である。60余人の僧が随った。貴賤、道俗の別なく幾千万の人々が別れを惜しみ見送った。

鳥羽より川舟に乗りて下る。摂津の経の嶋に着く。多くの村人が集まって上人を拝んだ。平清盛が1千部の法華経を石の面に書写して海に沈めた所である。

摂津の高砂に着かれた時、老翁と老女の夫婦が来て「私はこの浦の漁師で、幼いころから数え切れないほどの魚たちを殺してきました。ものの命を絶つものは地獄に落ちるといわれる。どうかこの罪業から救って下さい」と言った。

上人はこの老夫婦を憐れんで、「あなたがたは、南無阿弥陀仏と唱えさえすれば仏の悲願で極楽往生できるのです」と教えると、二人は涙に^{むせ}咽びつつ喜んだ。

同国の室の泊に着かれたとき、遊女の乗る小船が近づいてきた。遊女は「私はいかなる罪か、このような稼業に身を落として生きて参りました。この罪業深き私でも後の世に救われるには、いかにすればよろしいでしょう」と言った。

上人はこの遊女に、「そのように世を渡ったからには、その罪障深く、その報い



は計りがたい。その罪から逃れようと企てごとがあるなら、直ちに心を改めなけねばならない。そして今よりは阿弥陀仏にすがって、ただ念仏をして下さい。ただ深く本願を頼みとして、自分を卑しむ心は捨てなさい。本願を頼みに念仏をすれば往生

できるのです」と、優しく教えた。遊女は随喜の涙を流した。

帰路、上人は「この遊女の信心は尊く、往生を遂げたことであろう」と人に訪ねると「上人の教えを受けたのちは、近くの山里に住んで、一筋に念仏をしておられたが、ほどなく臨終を向かえ往生を遂げられた」と、その人は答えた。

好色一代男（井原西鶴） 巻5 欲の世の中にこれはまた（前半）

あるとき世之介は金左衛門を誘い、臨時の早舟を急がせ、その日の暮れ方、夕焼けの中を恋の港に錨をおろした。その日は7月14日の夜、この土地ではお盆の装いをこらし、男は小さな編み笠をかぶり、女は投頭巾なげずきんに大小をさして男装しているものもあり、女郎もうち交じっての大踊り、袖の香に引かれて廓に入ると、立花風呂、ちようじ丁子風呂などの揚屋が並ぶ。

広島風呂という揚屋に行って、丸屋、姫路屋、明石屋の三軒にいる80余人の女郎のうち7人を選び出し、どの女郎を敵娼あいかたにしようかと思案しながら酒にした。

末座にまだ脇明けの着物を着た若い女がいたが、別に利口ぶった顔もせず、脱ぎかけた上着の下に着ている肌着の、帷子の紋所の地蔵をつけているのも、何か曰くがありそうに見える。それからその女の前に厚割きやらの香木を焚いた香炉が廻って来たとき、静かに香をきいて少し小首をかしげ、二、三度も香炉を見直し、「今思えば」と言うと、トンと下に置いた。

世之介は聞きとがめて、「この香木をなんときかれた」と問うと、「まさしく諸葛（もろかずら）でございましょう」という。さらに「その木は江戸吉原の太夫・若山に縁のあるものではございませうか」と女が言うので、世之介が「そのとおり、若山に会った名残に貰ってきました」と答えると、「きっとそうでしょう。私がさっきふと口をすべらしたのは、備後福山のさるお方が、江戸で若山様に貰った香包だと仰って、同じ枕に臥せりました夜、お袖にたきしめていらっしやいましたのをうれしゅうございましたので、とてもよく思い出します」と言った。

世之介はすっかりこの女郎が気に入り「縁は異なるものだ」と思いを寄せ、導かれるままに「いい夢でもみようか」とさっそく亭主が用意した蚊帳かぶろをくぐった。

汗を物憂く思っているところへ、秋まで生き残った蛸かぶろを持たせて寄こし、



蚊帳の中に放して水草の花桶まで入れ、涼しい心持ちにさせておいて、「都の人の野とや見るらん」と即興に歌を口ずさみながら入ってきた立ち姿の美しさ、またその時になっての老朽さは、生来の廓の女と思われた。

（井原西鶴著 菱川師宣画 川崎七郎兵衛 貞享1(1684)刊)

